

地歴 問

地理歴史等

平成 31 年度 (前期日程)

注 意 事 項

- 1 「解答はじめ」というまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は 1 冊(本文 21 ページ, 下書用紙 2 枚)で、解答用紙は 1 枚です。下書用紙は問題冊子の中に挟み込んであるので、引き抜いて使っても構いません。なお、問題冊子と下書用紙は持ち帰って構いません。
- 3 すべての解答用紙に受験番号を書きなさい。なお、受験番号は、次の要領で明確に記入すること。

(例) 1) 受験番号 50001 番の場合 →

5	0	0	0	1
---	---	---	---	---

- 4 1) 世界史, 2) 日本史, 3) 地理, 4) 倫理, 政治・経済, 5) ビジネス基礎, 以上 5 科目のうちから 1 科目を選んで答えなさい。さらに、選択科目の番号を受験番号の隣の欄に書きなさい。

(例) 2) 日本史を選んだ場合 →

				2
--	--	--	--	---

- 5 解答は、解答用紙の所定の位置に横書きで書きなさい。他のところに書いても無効になることがあります。また、字数などの指示がある場合は、その指示に従って書きなさい。なお、字数制限がある場合、算用数字及びアルファベットに限り、1 マスに 2 文字入れることができます。それ以外の句読点や問題番号には 1 マスを使用すること。ただし、例えば「問 1」ならば「1」とのみ書いても構いません。なお、問題番号は問題ごとに指定された解答字数に含めます。

(例) 3) I の「問 1」の場合 →

I	5									
I	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="width: 20px; height: 20px;">1</td><td style="width: 20px; height: 20px;">.</td><td style="width: 20px; height: 20px;">.</td><td style="width: 20px; height: 20px;">.</td><td style="width: 20px; height: 20px;">.</td><td style="width: 20px; height: 20px;">.</td><td style="width: 20px; height: 20px;"></td><td style="width: 20px; height: 20px;"></td><td style="width: 20px; height: 20px;"></td></tr></table>	1			
1					

世界史

I 次の文章は、14世紀半ばに書かれた年代記の一部である。この文章を読んで、問いに答えなさい。(問1、問2をあわせて400字以内)

主の生誕より400年あまり、マジヤール人がパンノニアに到達してから29年目の年、マジヤール人すなわちフン人たちは、それまで司令官の一人であったベンデグーズの子アッティラを、ローマ人の風習に倣い、一致した意思でもって自らの王に据えた。アッティラは、弟ブダをティサ川からドン川に至る地の太守とし、自らはマジヤール人の王にして、大地の怒り、神の鞭と名乗った。(『彩色年代記』より)

問1 10世紀に東ヨーロッパで王国を建てたマジヤール人は、この年代記の中で、自らをフン人と同一視し、フン人の王アッティラを自らの起源として位置付けることで、新興勢力である自分たちの由緒を美化した。このマジヤール人が建てた王国を含め、カトリックに改宗してこの時期に国家形成した東ヨーロッパの王国を3つ答えなさい。

問2 上に引用した年代記の記述では、アッティラは、人々の意思で王となったことになっている。一堂に会した人々(有力者たち)が自らの指導者を選ぶというこの内容は、マジヤール人の年代記では『彩色年代記』に先立ち13世紀後半から14世紀にかけて現れた。このことは、西ヨーロッパをはじめとしてヨーロッパ各地で、まさにこの時期に、君主と諸身分が合議して国を統治する仕組みができたことを反映している。この仕組みとは何か、複数の具体的な事例を挙げ、中世から近代にかけての変化を視野にいれて説明しなさい。

Ⅱ 第二次百年戦争とも呼ばれるイギリスとフランスとの争いについて，両国の対立の背景および1763年に至るまでの戦いの経緯を説明し，この争いの結末がその後，世界史にどのような影響を及ぼしたかを述べなさい。(400字以内)

Ⅲ 1960年代後半に書かれた以下の文章を読み、下の問いに答えなさい。(問1、問2をあわせて400字以内)

国父、孫文先生が革命を唱えて以来、すでに70余年になる。われわれはこの間に絶えず敵と戦闘して何回も失敗を重ね、あるいは無数の勝利を得たが、今日もなお最後の成功を得られず、1949年には空前の大失敗。つまりソ連と とは最も卑劣であくどい手段と、最も残暴な武力をもって中国大陸を占拠したのである。

このため、われわれは父祖の地を追われて台湾に撤退したが、決して気を落とさず、今日こそ弱から強、危から安へと転換できる機会であると信じている。

この大難を経験することによって、われわれでさえ敵に屈服せず、死を誓って奮闘すれば、戦うほど強くなり、さらに大きな勝利を獲得することができるのである。なぜならば、われわれの従事している戦争は革命の戦争であり、国家民族のために独立を争い、同胞のために自由と正義を勝ち取るための戦いだからである。

われわれは革命戦争が必ず勝利をおさめる信念をもって清朝を打倒し、軍閥を消滅し、そして日本帝国主義をうち破った。今日もそれと同じ信念のもとにソ連を打倒し、 を消滅しなければならない。

(蔣経国『わが父を語る』より引用。但し、一部改変)

問1 ①に入る語句を記しなさい。

問2 ここで対立する両勢力の関係と1949年に至るその変遷についてまとめなさい。

